

## 「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 4年 山脇麻由

2015年度前期に、日本に来るフィリピン人移民についての授業を受けた。彼らの中には、リクルーターに不当に高額なお金を払ったり、自分と倍ほど歳の離れた人と結婚したりして日本に来る機会を手に入れる人もいるという。暮らしのために辛いことを我慢してまで日本に来るなんてなんて気の毒なんだ、というのがそれを聞いたときの率直な感想であった。そして、そのような辛い選択を人々に強いるフィリピンとはどのような国なのだろうかと思ったのがこの研修に応募した動機である。

実際にフィリピンの地を踏んで、まず、ちぐはぐな国であるという印象を受けた。街中には巨大なショッピングモールがそびえ立つ一方、少し車を走らせれば高架下に小屋を構えて暮らす人も見られる。スーパーマーケットで売られているもののほとんどは輸入品で、価格は日本と同程度のものも多くあった。話でも聞いていたが、経済発展は富裕層に恩恵をもたらすのみで、貧困層の生活の向上にはつながっていないことを実際に感じる事ができた。

研修中に、日本に移住する予定の人たちと直接話す機会を何度かいただいた。結婚のために日本に行くという女性の中には、私より年下の人もいた。結婚相手の写真を見せてもらうと、やはり相手の大半はおじいさん、よくておじさんである。交際期間は1年というものの、実際に会ったのは2回だけなど、よくそれで結婚に踏み切ったなと感じるような関係のカップルも多かった。また、お互いに十分に意思相通できる言語がない人もいた。フィリピン人女性と日本人男性の結婚にこのようなケースが多いことは、すでに授業で聞いて知っていた。歳が倍ほども離れ、簡単な会話がやっとできる程度の相手と結婚するなんて私には考えられないことなので、フィリピン人女性たちは裕福な生活を手に入れる手段として日本人男性との結婚を選ぶのだろうと思っていた。しかし、写真を見せてくれる彼女たちは本当に幸せそうで、日本での結婚生活を心待ちにしているようなのである。嘘をついている可能性もあるだろうが、私には二人の間に何らかの愛があるように感じられた。

日本の一般的な恋愛とはまた違う形ではあったが、違うからと言って一概に否定することはできないと感じた。日本人のおじいさんを魅力的に見せているのは、彼らが持つ財力や、彼らと結婚すれば日本で暮らせるという付加価値かもしれない。そうはいえども、私の判断基準で彼女たちを気の毒がることは失礼であったと反省した。また一方で、この状況を肯定することもできないと思った。私と彼女たちとでは、背景が違いすぎるのである。フィリピンでは十分なお給料を稼げる職がなかったり、お金の問題から大学に行けない人が多かったりと、より良い暮らしがしたいと思ったときの選択肢が少ないように感じた。

この研修を通して、ある問題について考える時、その背景にあるのは何なのかを考えることが重要であると感じた。また、私たちは今JFCの学習支援をしているが、これはフィリピンが抱える問題のほんの一部に過ぎないことを目の当たりにした。これからフィリピンが構造的問題を克服していくには長い時間がかかるだろうが、自分にできることをやっていきたいと思う。